

セフェリスの中の雲について — 『ヘレネー』を中心として—

佐藤 りえこ

セフェリスの「航海日誌Ⅲ」に収められている『ヘレネー』(1955)には、同じ題名のエウリーピデースの作品からセフェリスがヒントを得ていると考えられる箇所が散見される。中でも両作品の題名になっているヘレネーに対する好意的な立場——トロイアに赴いたのはヘレネー本人ではなく、女神ヘーラーが雲から造り出したヘレネーの幻であった——という立場にエウリーピデースもセフェリスも立っている点は、セフェリスの『ヘレネー』を理解するための重要な鍵となっている。そこで、パリスと共にトロイアに行った「偽のヘレネー」が νεφέλη「雲」から造られていることに着目し、「偽のヘレネー」を示す素材を集め、それらが「雲」とどのような関連をもつのかを分析した。そしてセフェリスが描いた「偽のヘレネー」がエウリーピデースの「偽のヘレネー」とどのような相違があるかを考察した。

エウリーピデースは「偽のヘレネー」を表すために、次のような素材を用いた。()の数字はテキストにおける出現箇所を示している。

ἄγαλμα (νεφέλης ἄγαλμα) 「像」(「雲の像」)(705 1219)

νεφέλη 「雲」(705 707 750 1219)

δόκησις 「幻、幽霊」(36 119 121)

εἶδωλον 「幻影、実体のないもの」(34 582 683 1136)

μίμημα 「模造品、偽物」(875)

λέχη 「婚礼(の床)」(584 590)

ὄνομα 「名前」(43 199 587 1110 1653)

これに加えて、神が「偽りのヘレネー」を創造したときに材料に用いたものに、「雲」の他に、αἰθήρ「大気」(584)がある。

これらの「偽りのヘレネー」を表す素材には、「目に見えているが、実体のないもの」と「本物に似た姿」、それに「本物と同じ名前(をもつもの)」という特徴がみられる。このうち、最初の二つの特徴は、「空にあって、その形

は見ることができるが、実体は水蒸気という形のないものからできている」という気象現象としての雲の本質と、「雲の形状を、別の実体のあるものになぞらえることができる」ことと関連があると考えられる。このことからエウリーピデースにおいて、「偽のヘレネー」は、「それを見る主体には本物と写るが、その実体は捉えることができないもの」であるといえる。

一方、セフェリスの「偽のヘレネー」を表すものに、次のような素材が用いられている。

ένα είδωλο 「幻」(38)

ένας ίσκιος 「影」(40)

ένα λινό κυμάτισμα 「麻のうねり」(48)

μας πεταλούδας τίναγμα 「蝶の羽ばたき」(49)

το πούπουλο ενός κύκνου 「白鳥の羽毛」(49)

ένα πουκάμισο αδειανό 「からっぽの表着(うわぎ)」(50 68)

μια Ελένη 「ヘレネーという女(もの)」(50 68)

δόλος 「たくらみ」(59)

上に挙げた素材の特徴を整理すると、「からっぽの表着(うわぎ)」「幻」「影」には、「目に映っているが、中味や実体のないもの」という特徴がある。また「ヘレネーという女(もの)」は、「名前は同じだが、実体が異なるもの」と言い替えられる。これらの特徴は、エウリーピデースの場合にもみられた。これに対して、「麻のうねり」や「蝶の羽ばたき」にある「可変性／反復性」という特徴は、セフェリス独自のものである。これは、「空に広がっては、消える」という動きを繰り返す気象現象としての雲の本質に関連づけられる。このことから、セフェリスの νεφέλη「雲」は、エウリーピデースの「雲」のイメージに加えて、「とどまることのない動き」「繰り返される動き」をもつものと捉えられる。

上述の νεφέλη「雲」を含む素材の分析から、セフェリスが描いた「偽のヘレネー」像は、「人間がその存在を信じて疑わないものが、実は実体のないものであり、本物あるいは真実であると思いついたために、過ちを招き、その過ちを繰り返す」という作品『ヘレネー』の主題に関連しているといえる。

なお、素材の中の「白鳥の羽毛」はヘレネーの誕生を、また「たくらみ」は「偽のヘレネー」が作り出された経緯を暗示していると考えられる点を付け加えておきたい。